The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 1920～30年代におけるカナダ少年赤十字の国際通信交換 |
| Author(s) | ベレジコワ，タチアナ |
| Citation | 日本語・日本文化. 2021, 48, p. 97-126 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/79315 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

# 1920～30年代におけるカナダ少年赤十字の国際通信交換

ベレジコワ・タチアナ

## はじめに

1914年に、カナダはイギリス連邦の一員として第一次世界大戦に参戦し、ヨーロッパへ兵士を派遣した。カナダとイギリスの兵士の救済活動に直ちに取りかかったのは、1896年に創立したカナダ赤十字であった。そして、1915年には、カナダ赤十字の救済活動を援助するために、サスカチュワン州に初めての少年赤十字団が結成された[1]。

第一次世界大戦中、カナダ赤十字は規模を大きく拡大し、知名度を上げることができた。そして、1922年にスイスのジュネーブで開催された赤十字社連盟の第一回総会で、少年赤十字が赤十字の下部組織として正式に承認されることになった。

少年赤十字の運動は、アメリカとカナダで始まったが、1922年以降、日本、ヨーロッパ諸国など、多くの国において設立され、次第に大きな国際的運動まで発展していった。カナダ少年赤十字は、1922年に各州において創立され[2]、全国的な運動に発展した。

少年赤十字は、「健康の保持と促進」、「社会奉仕」、そして「国際理解と国際親善」という三つの目標を掲げた。カナダ少年赤十字も、こうした目標の下に活動を展開した。カナダ少年赤十字の指導者は、上記の目標を達成するために、子どもたちの健康と衛生に関する啓蒙活動、地域と社会に奉仕する活動を奨励し、子どもたちを「良い国民」として育てることに尽力していた。

さらに、国際的視野を育むために、カナダの少年赤十字団員は、世界各国の子どもたちと通信物を交換していた。この活動は、当時、「国際通信交換」と呼ば

れた。各国の子どもたちの間に交換された通信物の中には、手紙とアルバムなどといった文字資料、そして人形、玩具、絵画、写真などといったビジュアル資料が多く入っており、こうしたものを送り合うことで、各国の子どもたちは、お互いの日常生活や少年赤十字の団員としての活動、自国の文化と習慣を外国の子どもたちに伝えていたのである。この交流は、国際平和と国際理解に貢献できる手段として少年赤十字の指導者や教育者によって高く評価され、強く奨励されたのである。

国際通信交換は、アメリカ、カナダ、日本を始め、少年赤十字が創立された国において実施され、1920 年代後半～ 1930 年代にはピークを迎えた。カナダからの通信物の数は、1930 年代になると、大きく増加した。カナダは、1937 年にアメリカと日本に次いで世界第 3 位、1938 年にはアメリカに次いで世界第 2 位を占めていた。さらに、カナダ少年赤十字の交流相手国は、1927 年に 24 カ国、1935 年に 35 カ国であり、交流の範囲も非常に広かったと言える。つまり、カナダ少年赤十字は、世界各国の少年赤十字運動において重要な位置を占め、大きな成果を上げた国であったと言えよう。

本研究は、各国の少年赤十字の国際通信交換に注目し、各国の子どもたちの国際文化交流の実態を明らかにするものである。現時点までに、筆者は日本とアメリカにおいて資料調査を行い、一連の論考においてこの 2 カ国における少年赤十字の歴史的発展、国際通信交換の展開、団員たちの国際人形交流などについての考察を行なった [3]。

本稿は、1920 年代～ 30 年代におけるカナダ少年赤十字の活動に注目し、その歴史的発展、国際通信交換の展開、その意義と評価を取り上げたものである。

本文に入る前に、カナダ少年赤十字の関する先行研究を紹介したい。

カナダ少年赤十字に注目した研究を大別すると、カナダ少年赤十字の活動を総括的に取り上げたもの、健康の保持と促進の活動に注目したもの、少年赤十字の活動にカナダの先住民族の関わりを明らかにしたもの、そして国際親善を目的とした国際通信交換を取り上げたものがある。以下では、カナダ少年赤十字の国際通信交換に関する言及がある先行研究のみを取り上げたい。

まず、ナンシー・シーハン（1987）は、カナダ少年赤十字の創立と発展の歴

史、主な活動を総括的に取り上げ、当時の時代背景にも注目している。とりわけ、19 世紀末にアメリカで起こった教育改革運動の影響で、カナダにも進歩主義教育（Progressive Education）が伝わってきた。進歩主義教育において重要視された経験主義教育と児童主義教育、国際的な精神を育む教育が少年赤十字の活動の基礎となり、カナダ少年赤十字の活動にも見られるという。さらに、シーハンは、カナダがイギリス連邦の一員であったため、カナダ少年赤十字の指導者が、様々な活動を通してイギリス以外の国々からの移民の子どもに、イギリス人の価値観を共有させ、イギリス人系のカナダ人と同化させようとしたという興味深い指摘を行なっている。シーハンは、これを「カナダ化」と呼んでいる。健康の保持と促進に関する啓蒙活動、機関誌の記事を通して行われた英語とカナダの歴史と地理の教育などは、各国からの移民の同化を促進させたものであったという。さらに、シーハンは、カナダ少年赤十字の国際通信交換にも触れ、交流が行われた国々の一部と交換アルバムの内容を総括的に紹介している [4]。

こうして、シーハンの研究は、当時の時代背景とカナダ少年赤十字の指導の方針について重要な指摘を行なっているものの、国際通信交換に関する記述が断片的であり、不明瞭な点が多く残されている。

次に、アンドレア・ウォルシュ（2009）は、ブリティッシュコロンビア州 [5] オリバー市の学校に通っていたカナダの先住民族の子どもたちが、少年赤十字の国際通信交換を通して国内外の子どもたちと交流を行なっていたこと、カナダ少年赤十字の機関誌に自分たちの手紙と絵画を実際に載せてもらうことができたこと、また少年赤十字の活動の一環として芝居などをする際に、カナダではなく自分たちの民族の歴史や伝説を題材として使うことを許されたことを明らかしている [6]。この研究から、人数は極めて少なかったとはいえ、先住民族の子どもたちも国際通信交換に関わっていたことがわかる。

さらに、アンマリー・バルデス（2015）は、赤十字社連盟によって出版された *Juniors all!:Our Book Our Very Own Book* (1937) の内容の分析を行なっている。この本は、世界各国の子どもたちが作った交換アルバムの内容の一部を転載したものである。この本から、各国の少年赤十字団員の積極的な姿勢、指導者たちの国際通信交換への高い期待が読み取れるという [7]。

最後に、サラ・グラスフォード（2018）は、カナダ少年赤十字の機関誌とカナダに残存している交換アルバムの内容を分析し、シーハン（1987）と同様に、イギリス以外の国からの移民の子どもたち、そして先住民族の子どもたちは、少年赤十字の活動を通して、イギリス系のカナダ人と同化させられようとしたという結論を出している[8]。さらに、グラスフォードは、機関誌上では、先住民族の存在が遠い昔の歴史のように紹介され、当時のカナダの過去のように扱われていた一方で、ケベック州[9]の北部にあるセント・レジスに定住した先住民族の子どもたちが、学校で母語を使用することは許されていなかったが、少年赤十字団の名称だけに母語の言葉を使うことが許されたという具体的な例も挙げている。

さらに、グラスフォードは、少年赤十字の指導者が、機関誌の記述を通して、イギリスの歴史と文化、王室へ子どもたちの関心を引かせようとしていた他、少年赤十字団は、学校教育が英語で行われた学校を中心に発展し、フランス語の学校ではあまり広まらなかったという傾向も示している[10]。

こうして、グラスフォードは、カナダ少年赤十字が人種、宗教、政治に対して中立的な立場を取り、国際性と多様性を重視していた団体であったとは言っても、機関誌を通して国内向けに発信された内容には、イギリス人の価値観、イギリス系カナダ人に関わる歴史と文化に重点が置かれ、先住民族やイギリス以外の国の移民の存在が重要視されていなかったという。

以上の先行研究は、カナダ少年赤十字の創立とその背景、少年赤十字の運動への先住民族の関わり、少年赤十字の出版物の内容の分析といった興味深い課題を取り上げている。一方、具体的なデータに基づいたカナダ少年赤十字の歴史的発展、国際通信交換の規模と範囲、他の国との比較など注目されてこなかった課題も多く残されている。

したがって、本稿においては、1920 ～ 30 年代におけるカナダ少年赤十字の規模と国際通信交換の歴史的展開に注目し、団員数、主要な交流相手国、国際通信交換の回数を明らかにした上で、アメリカと日本との比較を行うことにしたい。さらに、1920 ～ 30 年代のカナダにおいて、少年赤十字の国際通信交換はどう評価されたのか、またカナダから贈られた通信物はどのような特徴を持っていたのかを具体的な例を通して分析したい。これによってカナダにおける少年赤十字の

発展、世界各国の少年赤十字運動におけるカナダの位置、そしてカナダ少年赤十字の団員たちが参加していた国際文化交流の一側面がより明らかになるだろう。

上記の点を明らかにするために、本稿において以下の資料を調査対象にした。とりわけ、カナダ赤十字によって発行された *Annual Report*（1922 ～ 41 年）、カナダ赤十字の機関誌 *The Canadian Red Cross*（1922 ～ 28 年、1928 年以降は未確認）、カナダ少年赤十字の機関誌 *The Canadian Red Cross Junior*（1921 ～ 26 年と 1933 ～ 41 年、なお 1927 ～ 32 年は未確認）である。

ちなみに、本稿の英語の引用文は、全て筆者訳であること、原文は註において示したこと、必要な箇所に〔〕内（英文の引用では [] 内）に筆者の注釈を加えたことをあらかじめ断っておきたい。

## 1. カナダ少年赤十字の発展

前述のように、少年赤十字は、1922 年にカナダの各州において創立され、全国的な運動に発展した。当時のカナダ少年赤十字は、カナダの 9 州において創立され、その発展も記録されたが、ノースウエスト準州、ユーコン準州は少年赤十字の統計データに含まれていなかった。そのため、今回は、カナダ少年赤十字の発展を、ブリティッシュコロンビア州、アルバータ州、サスカチュワン州、マニトバ州、オンタリオ州、ケベック州、ニューブランズウィック州、ノバスコシア州、プリンスエドワードアイランド州、そして 1937 年以降はニューファンドランドとニューファンドランドに属するラブラドル州 [11] のデータを使って分析し、ノースウエスト準州、ユーコン準州を分析対象にしないことをあらかじめ断っておきたい。

以下に示した地図は、1927 年時点のカナダの各州の境界線を表したものである。本稿の分析は、1920 年代後半～ 1930 年代を中心とするため、1927 年の地図を表示することにした。ちなみに、この時期の境界線は、現在とはほぼ変わらない。

図 1：カナダの各州の境界線（1927 年）[12]

次に、上記に示した州において、少年赤十字の団員数の発展を見てみよう。以下の図は、1922 ～ 41 年の団員数の変遷を示したものである。

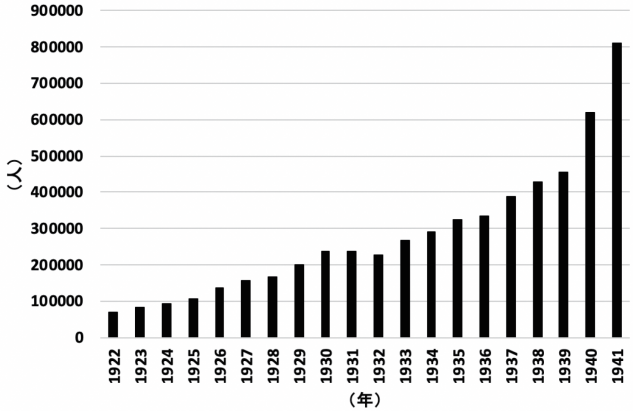


図 2：カナダ少年赤十字団員数（1922 ～ 41 年）[13]

この図によると、カナダ少年赤十字の団員数は、1922 年以降着実に増加している。ちなみに、1933 年には小中学校の生徒だけではなく高校の生徒の入団が認められたこと、1937 年にはニューファンドランド州の団員数のデータも計算されるようになったことから、これらの年には、例年より高い増加率が見られると推測される。また、1939 年には、カナダが第二次世界大戦に参戦したため、1940 年と 1941 年に例年より多くの生徒が少年赤十字に入団したと思われる。

ただ、全国の総学校児童数における少年赤十字団員の割合を見ると、1925 年には約 5%、1930 年には約 11%、1935 年には約 15%、1940 年には約 28%の学校に通っている子どもが少年赤十字団に入っていたのがわかる。

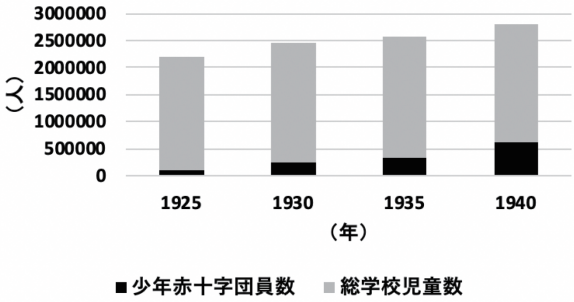


図 3：総学校児童数における少年赤十字団員の割合
（1925 年、1930 年、1935 年、1940 年）[14]

ただ、当時は、会費を納めず活動に参加していた生徒がいたり、ノースウエスト準州、ユーコン準州などのデータが統計されなかったりしたため、実際に少年赤十字の活動に参加した生徒の数は、上記のデータより多かったという可能性は否定できない。

ちなみに、アメリカの場合は、1925 年には約 23%、1930 年には約 26%、1935 年には約 25%、1940 年には約 28%の学校に通っている子どもが少年赤十字団に入っていたのがわかっている[15]。つまり、アメリカでは、カナダより多くの子どもたちが少年赤十字に入団していたのである。

さらに、カナダ少年赤十字の団員数をアメリカと日本の団員数と比較すると、以下のようになる。

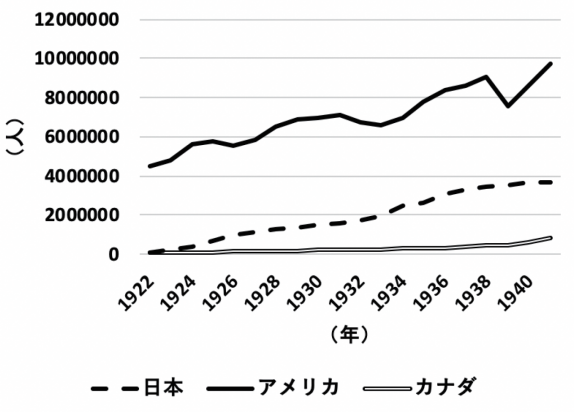


図 4：日本、アメリカ、カナダの少年赤十字団員数の比較（1922 ～ 41 年）[16]

上記の図から、この 3 カ国における少年赤十字の規模の違いがわかる。1922 年には、日本とカナダは、アメリカと比べて少年赤十字団員数が圧倒的に少なかった。それ以降、日本の団員数がカナダに比べ大きく増加した。カナダ少年赤十字の団員数が最も高かった 1941 年でさえ、カナダ少年赤十字の団員数は、日本少年赤十字団員数の 4 分の 1 程度だったのである。

前出のサラ・グラスフォード（2018）は、カナダ少年赤十字が、学校教育が英語で行われた学校を中心に発展し、教育がフランス語で行われた学校にはあまり発展しなかったという指摘をしている。このことから考えると、英語はカナダにおける少年赤十字の発展を妨げるものになったかもしれないと推測される。

## 2. 国際通信交換

### 2-1. 交流の相手国

カナダ少年赤十字の国際通信交換に関する記述は、1923 年の *The Canadian Red Cross* にはすでに見られる。この号の記事には、カナダ少年赤十字団員が、イギ

リスとニュージーランドの子どもたちと国際通信交換を行ない、将来交換の範囲が広がる可能性があるということが書かれている[17]。この予想の通り、これ以降、交換相手国の数が実際に増えていった。相手国の数は、年によって多少の増減はあるものの、例えば、1927年には24カ国、1929年には29カ国、1932年には23カ国、1935年には34カ国であった。また、より具体的な例を挙げると、1927年には、アメリカ合衆国、日本、北ヨーロッパ（スウェーデン、ノルウェー）、西ヨーロッパ（イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、オーストリア）、東ヨーロッパ（ブルガリア、ハンガリー、チェコスロバキア、ラトビア、ユーゴスラビア、ポーランド、ルーマニア）、南ヨーロッパ（ギリシャ、イタリア、スペイン）、そしてニュージーランド、南アフリカ、南アメリカ、オーストラリアとの交流が行われた[18]。

また、1927～38年の間に交流が毎年欠かさず行われた国は、アメリカ合衆国、日本、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、フランス、ベルギー、チェコスロバキア、オランダ、イタリア、ポーランド、スウェーデンという12カ国であり、これらの国々が主要な相手国であったと推測できる。

さらに、交流相手国の中に当時のイギリス連邦に一員であった国（オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、インド、エジプトなど）が入っており、これらの国々との交流も継続的に行われたようだ。

こうして、カナダ少年赤十字は、最大34カ国と交流していたが、毎年のように交流が行われた国の数は約12カ国であった。その中には、イギリス連邦同士の国もあったのがわかる。

ちなみに、第一次世界大戦中、赤十字の活動が活発であった国ほど、少年赤十字の国際通信交換を盛んに行なっていたという傾向が見られる。とりわけ、第一次世界大戦中、大きな被害を受けたフランス、イタリア、ポーランド、ハンガリーなどにおいて赤十字社員が救済活動を行なっていた。その時に作られたネットワークが、少年赤十字団員の国際通信交換の際にも利用されたのではないかと推測できる。

こうして、カナダ少年赤十字の交流相手国には、イギリス連邦の一員であった国々の他に、第一次世界大戦中、赤十字の活動が活発であった国、英語圏の国が

多く見られるが、その他に日本ともの交流が非常に盛んであったことは注目に値する事実である。実際、英語訳が必要な交換アルバムや子どもたちの手紙は、パリにあった赤十字連盟の本部を通して送られ、翻訳されたが、日本からの贈物だけは、東京にある日本赤十字の本部において翻訳され、カナダ赤十字の本部へ直接発送された。日本は、アメリカとも、パリの赤十字連盟本部を通さず、直接的な交流を行なっていたため、他の国より多くの通信物の交換を長く維持することができたのではないかと思われる。

### 2-2. 交流の規模

次にカナダ少年赤十字の交流の規模を具体的な数字を挙げながら見てみよう。以下の図は、カナダ少年赤十字が受信し、発信した通信物の数、またその総数を示したものである。

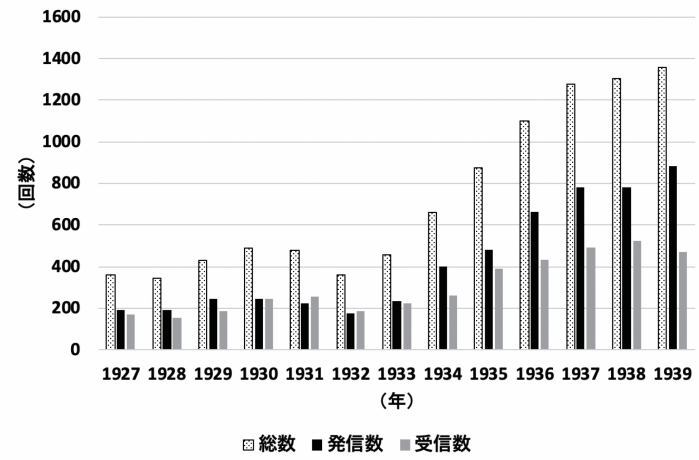


図 5：カナダ少年赤十字の国際通信交換回数（1927 ～ 39 年）[19]

この図では、カナダ少年赤十字から発信された通信物の数を「発信数」、カナダ少年赤十字が受け取った通信物の数を「受信数」、そして、前者と後者を合わせた数を「総数」とした。

まず、総数について見てみよう。国際通信交換の回数は、1928年に一回減少し、1930年までの2年間、緩やかに増加していく。そして2年間連続減少する。その後の7年間は、毎年増加傾向を示す。1933～39年の間の増加は、2倍以上であったこと、1933年以降、発信の数が急増したこともこの図から確認できる。

なぜ、1933年以降、国際通信交換の回数が大きく増加したのかは興味深い問題である。その理由について次のようなことが考えられる。まず、1930年代後半には、カナダ少年赤十字の機関誌において国際理解に貢献できる活動を奨励する記述が多く載せられるようになった。それは、カナダ少年赤十字の機関誌の編集者であったジェーン・ブラウンが人道精神と国際親善を、以前にも増して強く宣伝するようになったからであるという[20]。つまり、この時期の機関誌の内容は、国際通信交換の増加に影響を与えたことが推測できる。

さらに、1934年以降、国際的に話題になった少年赤十字の行事が多く行われ、それにちなんで多くの贈物が各国の間に送られたことも指摘しておかなければならない。まず、1934年10月に東京において開催された第15回赤十字国際会議である。この会議は日本赤十字だけではなく、日本少年赤十字にとっても重要な行事であり、この会議と同時に少年赤十字国際展覧会が開催された。この展覧会への出品物として、カナダを始め、29カ国からの作品が届いた[21]。この会議は、赤十字の歴史において初めてアジアの国で行われたため、各国の強い関心を引いたものであったという[22]。さらに、当時、日本少年赤十字は、団員数において世界第3位を占め、国際通信交換も熱心に行なっていたため、世界各国において日本少年赤十字の知名度が高かったことも推測できる。この展覧会にちなんでカナダから日本へ送られた出品物をこの章の第4節において取り上げたい。

そして、その他に、1935年にはパリにおいてフランス少年赤十字主催の人形展覧会[23]、ブダペストにおいてハンガリー少年赤十字展覧会などが開かれ[24]、その際にも各国から人形や交換アルバムを始めとする多くの出品物が発送された。また、返礼として、主催国から多くの品々も送られたという。こうした行事の影響もあり、1930年代後半には通信物の数が増加したと推測できる。

次に、カナダ少年赤十字の通信物の総数（受信と発信を合わせた数）をアメリカと日本の通信物の総数と比較してみよう。

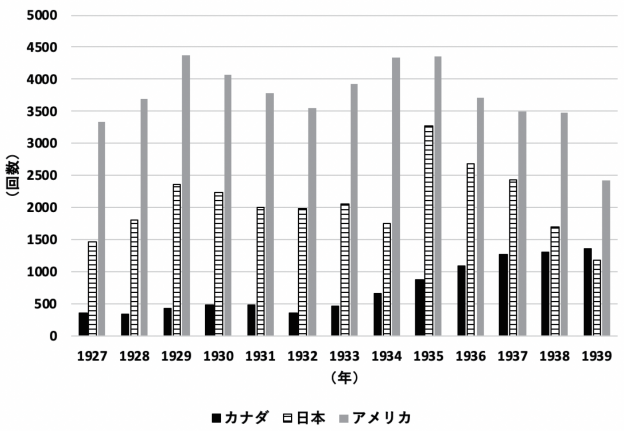


図 6：カナダ、日本、アメリカの国際通信交換の総数の比較（1927 ～ 39 年）[25]

この図から、1927 ～ 39 年の間、アメリカは通信物の総数が最も多かったことがわかる。アメリカは長い間、通信物の総数において世界第 1 位を占めていた国であった。これに対して、日本はアメリカより 2 分の 1 ほど通信物の数が低く、カナダはさらに少なかった。ただ、1939 年になると、カナダの交換の総数は、日本を上回った。

ちなみに、通信物の発信だけを見ると、カナダ少年赤十字は、1935 年にアメリカ、日本、ポーランドに次いで世界第 4 位 [26]、1937 年にアメリカと日本に次いで世界第 3 位 [27]、1938 年にアメリカに次いで世界第 2 位 [28] を占めていた。世界第 2 位の位置は、1939 年にも報告された [29]。カナダ少年赤十字の通信物の発信数は、1938 年と 1939 年に日本の発信数を上回ったことを日本側の資料からも確認できる [30]。

以上のように、カナダ少年赤十字の国際通信交換の発展を、日本とアメリカと比較すると、その発展がいかに大きかったのかがわかる。ただ、一方、カナダの発信数が日本の発信数を上回ったことは、この時期の日本の発信数が急速に低下していたということの証左でもある。この時期は、第二次世界大戦の影響で輸送が困難になったことが低下の理由として考えられる。

ちなみに、筆者はこれまでの論考において、1925 ～ 41 年における日本にとって主要な交流相手国であった国をすでに明らかにした[31]。日本と交流が最も盛んであった国を並べると、アメリカが 1 位、カナダは 2 位、ポーランドが 3 位であった。2 位のカナダが、この位置に上ることができたのは、1933 年以降の交流が急速に拡大していったためであろう。

さらに、日本の国際通信交換においてアメリカとカナダとの交流の割合を計算すると、次のようになる。

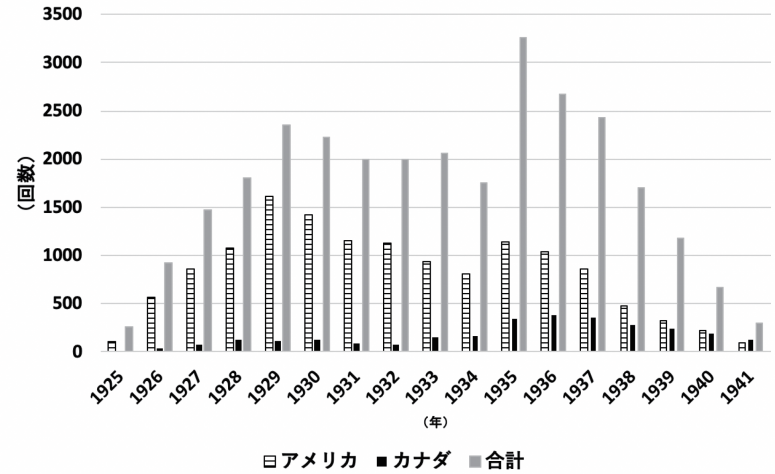


図 7：日本少年赤十字の国際通信交換におけるアメリカとカナダとの交流の割合（1925 ～ 41 年）[32]

この図からわかるように、日本少年赤十字の国際通信交換におけるアメリカとの交流の割合は、1929 年が最も高かった。それ以降は、交流の回数が緩やかに低減していき、1935 年に一度増加し、そして再び低下の傾向を示した。このような変動があったにも関わらず、アメリカとの交流は、日本少年赤十字の国際通信交換において非常に重要な位置を占めていた。1929 年以降は、低下の傾向があったものの、他の国と比べると、アメリカとの交流の割合が最も高

かったことが確認できる。

これに対して、カナダとの交流は、1933 年までは非常に少なかったが、1933 年以降は徐々に増加し始めていった。そして、1941 年にはアメリカとの交流を上回るまで増えた。カナダ少年赤十字の国際通信交換の総数も 1933 年以降急速に拡大していった。その理由は、日本との交流がより活発になったからのではないかという仮説を立てたい。ただ、この仮説を証明するには、カナダ少年赤十字の通信物の発信数を示すデータが必要である。そのため、この仮説の証明は今後の検討課題にしたい。

さらに、アメリカと日本の少年赤十字のデータから判断すると、カナダ少年赤十字は、1939 年以降もアメリカと日本との交流を行なっていた。アメリカの場合は、その回数はが、1940 ～ 41 年にはさらに増加し、1942 ～ 44 年の間は減少傾向を示した[33]。ただ、日本の場合は、カナダからの通信物の数は、1939 年以降緩やかな減少を示し、1942 年に中断されたのである。

### 2-3. カナダの各州における国際通信交換の展開

次にカナダの各州において、国際通信交換の規模はどうだったのかを 1931 ～ 39 年のデータを使って確認しよう。以下の図は、1931 ～ 39 年の間、各州の少年赤十字団員が外国へ発信した通信物の数を合わせたものである。

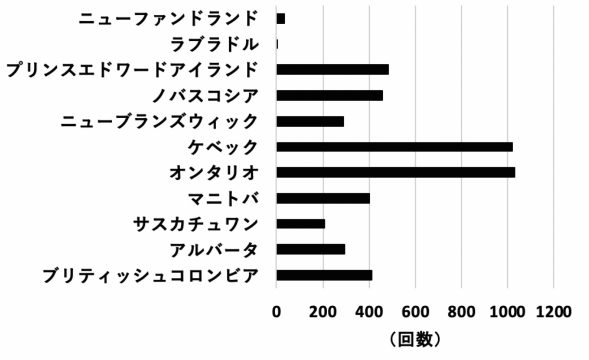


図 8：カナダ少年赤十字の国際通信交換の州別の発信の回数（1931 ～ 39 年）[34]

9年間の発信物の総数を計算すると、発信の回数が最も多かったのは、オンタリオ州、ケベック州であったのがわかる。その次に、プリンスエドワードアイランド州、ノバスコシア州、ブリティッシュコロンビア州、マニトバ州であった。

なぜオンタリオ州、ケベック州は、通信物の発信が最も多かったのか。それは、この二つの州は少年赤十字の団員数が最も多かった州であったからであろう。

以下の表1－1と表1－2は、1926～29年と1936～41年におけるカナダの各州の団員数をまとめたものである[35]。以下の表は、9州を最西部にあるブリティッシュコロンビア州から最東部にあるニューファンドランド州までの順に並べ、州名を示すには略称を使用した。さらに、各年において、1位を占めていた州をグレーに色塗りし、2位を占めていた州をボールド、3位を占めていた州をイタリックで示した。

表1-1：カナダ少年赤十字の州別の団員数（1926～29年、1936～41年）[36]

| 年 | BC | AB | SK | MB | ON | QC |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1926 | 1,031 | *27,078* | **30,000** | 9,000 | 45,363 | 9,757 |
| 1927 | 1,510 | *25,039* | **27,089** | 11,002 | 46,984 | 12,733 |
| 1928 | 2,280 | *31,352* | 37,219 | 12,096 | **34,760** | 17,610 |
| 1929 | 3,450 | *32,975* | **40,273** | 12,141 | 43,480 | 29,204 |
| 1936 | 14,247 | 18,077 | *39,381* | 25,716 | 127,555 | **49,851** |
| 1937 | 23,271 | 20,423 | *38,220* | 29,205 | 135,939 | **50,888** |
| 1938 | 25,013 | 22,717 | *41,385* | 29,550 | 155,322 | **50,983** |
| 1939 | 26,855 | 23,631 | *39,472* | 32,509 | 166,403 | **51,720** |
| 1940 | 30,995 | 29,433 | **106,813** | 45,174 | 221,164 | *52,601* |
| 1941 | 60,089 | 40,265 | **138,865** | 62,980 | 294,032 | 57,904 |

※表1－1の単位は「人」。
※※カナダ州名の略称：ブリティッシュコロンビア州=BC、アルバータ州=AB、サスカチュワン州=SK、マニトバ州=MB、オンタリオ州=ON、ケベック州=QC

表 1-2：カナダ少年赤十字の州別の団員数（1926 ～ 29 年、1936 ～ 41 年）

| 年 | NB | NS | PE | NF |
|---|---|---|---|---|
| 1926 | 8,533 | 6,058 | 666 | |
| 1927 | 12,001 | 19,797 | 1,000 | |
| 1928 | 11,254 | 19,207 | 985 | |
| 1929 | 10,961 | 25,364 | 1,460 | |
| 1936 | 16,356 | 27,150 | 15,210 | |
| 1937 | 21,109 | 30,003 | 15,277 | 23,349 |
| 1938 | 24,903 | 31,503 | 15,800 | 32,800 |
| 1939 | 33,262 | 32,004 | 15,974 | 33,014 |
| 1940 | 33,664 | 48,877 | 15,981 | 36,425 |
| 1941 | 35,676 | *66,233* | 15,993 | 38,875 |

※表 1－2 の単位は「人」。
※※カナダ州名の略称：ニューブランズウィック州 =NB、ノバスコシア州 =NS、プリンスエドワードアイランド州 =PE、ニューファンドランド州 =NF

上記のデータからわかるように、オンタリオ州とケベック州は、他の種と比べて、団員数が多かった。その理由で、通信物の発信数も多かったと推測できる。

さらに、サスカチュワン州における少年赤十字の発展は、活動開始の時から、活発であり、初代の少年赤十字部長であったジェーン・ブラウンを始め、多くの教育者が赤十字社員であったため、少年赤十字の団員数も多かったとシーハン（1987）は指摘している。ただ、この州は、その国際通信交換の数が他の州より少ない。

また、サスカチュワン州、ブリティッシュコロンビア州とオンタリオ州の学校は、早い時期から進歩主義教育をカリキュラムに取り入れ、これらの州には、体験主義教育、児童主義教育を積極的に実施していた学校が多かったという[37]。その理由で、サスカチュワン州とオンタリオ州において、少年赤十字が大きく発展し、体験主義教育の良い手段としてされていた国際通信交換は、オンタリオ州において活発に行われたこも推測できる。

ちなみに、各州の総学校児童数における少年赤十字の団員数の割合を、1940 年のデータに基づいて計算してみると、プリンスエドワードアイランド州と

ニューファンドランド州における少年赤十字団員の割合が最も高かったのがわかる。

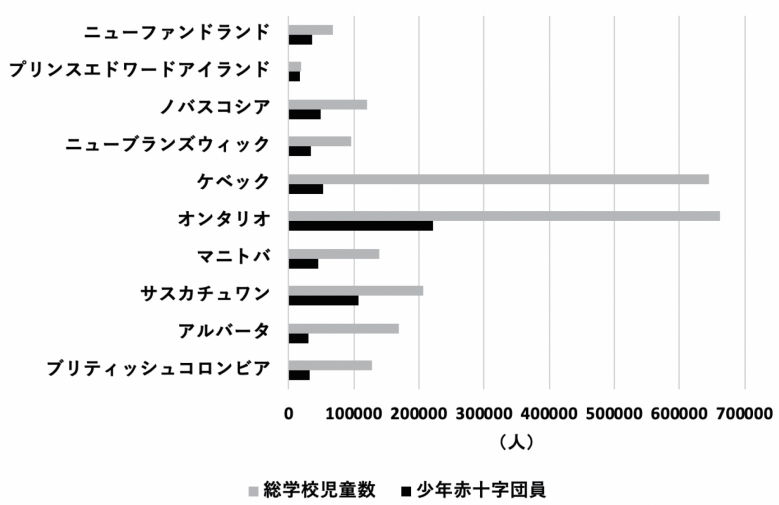


図 9：カナダの各州の総学校児童数における少年赤十字の団員数の割合（1940 年）[38]

1940 年には、この割合が、プリンスエドワードアイランド州は 85％、ニューファンドランド州は 54％、ケベック州は 8％、オンタリオ州は 33％であったようだ。前述のように、グラスフォード（2018）は、少年赤十字団が学校の教育が英語で行われた学校を中心に結成され、フランス語の学校ではあまり普及しなかったと指摘しているが、ケベック州とオンタリオ州には、フランス語の学校が多かったため、少年赤十字団員の割合が低かったという仮説が成り立つ。

一方、プリンスエドワードアイランド州とニューファンドランド州は、総学校児童数が低く、少年赤十字団員が少なかったが、多くの学校が少年赤十字に加盟し、活動を積極的に行なったことも推測できる。

こうして、各州の団員数が発信された通信物の数にある程度影響を与えたと推測できるが、団員数が少なかったが通信物が多かったという州もあったため、各州における国際通信交換の実態についてはさらなる調査が必要である。

### 2-4. 通信物の特徴

1934 年の第 15 回赤十字国際会議にちなんで開催された少年赤十字国際展覧会には、カナダ少年赤十字から、多くの出品物が贈られた。以下は、カナダからどのようなものが贈られたのか、具体的に見てみよう。引用は少し長くなるが、重要な内容なので省略せずに下に示す。

> この展示には様々な資料が含まれている。きれいな手書きで書かれた挿絵入りの交換アルバムからは、カナダの歴史の概要を知ることができるほか、木材・鉱石をはじめとするカナダ製品の見本品を見ることができる。カナダのパルプ製造[39]や毛皮動物の捕獲[40]を含む多種多様な産業の説明文とイラスト、カナダ人の服装をした人形、家具や調度品、カナダのスポーツ用品のイラストもある。
>
> 〔ケベック州〕ガスペ市の中学校のウィリング・ワーカーズ団の団員たちからは、美しい交換アルバムが日本に届くことになる。このアルバムは、1534 年にジャック・カルティエがケベックに上陸したことを祝うイベントが、その年の夏にガスペで行われた経緯と、カナダのウィンタースポーツの解説が、絵図入りで記されたものである。アルバムには、トボガンぞり、そり、1 足の雪靴、スキー、スケートのミニチュアが添えられている。〔アルバータ州〕カルガリー市の尋常学校の団員たちからも、歴史を描いたスケッチ画が届く。これには 1497 年にセバスチャン・カボットが白人として初めて北米に上陸した時以来の歴史が描かれている。さらにカナダの主要都市の発展の様子やハドソン湾会社[41]の歴史が挿絵入りで解説されており、カルガリー市近郊のプリンスエドワード牧場（E.P. Ranch）[42]、カナダ西部の鳥類、花、動物の絵図も入っている。オンタリオ州ティミスカミング地区のアンクル・ジャック・ジュニア〔の団員たち〕からは、オンタリオ州北部によく見られる 20 種の樹木から採取した小枝と、鉱石の六つの標本が送られた。マニトバ州ベレンス・リバーのユニオン・ジャック団のインディアンの子どもたちは、複雑に作られたモカシンや、ビーズのネックレスや装飾品といった、珍しい展示品を送っている。ブリティッシュコロンビア州ヘイゼルトン村の学

校のインディアンの子どもたちからは、繊細に色彩をつけたフックド・ラグが送られた。このラグは、サンダーバード[43]とメープルリーフ[44]の絵を組み合わせ、中央に赤十字のマークをあしらったものである。〔オンタリオ州〕ベルビル市のジョージ・ストリート・スクールの団員たちは、青いプリーツ・スカート、白地に青色の装飾のついたセーラー服、ネクタイを身に付けた、カナダの典型的な女学生姿の人形を自作している。また、ブリティッシュコロンビア州エスキモルトのランプソン・ストリート・スクールの生徒たちは、見事な衣装を着た赤ちゃんの人形と、ゆりかごを送った。赤ちゃんの人形は家庭科の授業で生徒たちの手によって作られたものであり、ゆりかごも技術科の授業で男子生徒たちが製作したものである。これらは家内工業の良い標本となっている[45]。[46]

カナダから日本へ送られた出品物は、この記事の内容から判断すると、全部で50個以上であった。その中身は、交換アルバムは約9冊、人形は約7体、その他に家具、家の器具、スポーツ道具のミニアチュア、そしてカナダの先住民族の手工芸品、服装、道具などのミニアチュアなどが入っていた。

贈物は、約27団から送られ、カナダの最西部にあるブリティッシュコロンビア州から、カナダの東部のニューファンドランドに属するラブラドル州まで、各州からのものが用意された。

この出品物の目的は、東京の少年赤十字展覧会を訪れる諸外国の人たちにカナダをよりよく理解されることであったという[47]。そのため、この贈物はカナダの地理、歴史、産業、民族などを幅広く紹介するように選ばれたと考えられる。

出品物の中に多くの人形が入っていたことも、本研究にとって重要な情報である。筆者はこれまでの論考において、1920年代後半～1930年代には日本少年赤十字が、アメリカ、フランス、ハンガリーなどと多くの人形を交換したことを明らかにした[48]。つまり、日本少年赤十字の国際通信交換において、人形は重要な位置を占めていたのである。さらに、日本はアメリカと多くの人形を交換したことが、アメリカと日本の少年赤十字の機関誌の内容から確認できる。カナダと日本の人形交流の実態は、まだ不明な点が多いが、上記の引用から判断すると、カ

ナダと日本の間でも人形交流が行われたと容易に推測できる。

そして、前述の通り、グラスフォード（2018）、シーハン（1987）は、カナダの先住民族がイギリス系のカナダ人と同化すべき存在として捉えていたと指摘しているが、上記の記事で掲載された出品物を見ると、先住民族の文化と歴史を表した多くの贈物が先住民族によって用意されたのがわかる。

シーハン（1987）が指摘しているように、20 世紀初頭のカナダ人は、自国のアイデンティティを模索し、カナダらしさを構築しようとしていたが、先住民族を象徴するものは、カナダ特有のものであり、外国人にとって印象的であったため、1934 年の少年赤十字展覧会のための出品物に積極的に取り入られたと推測できる。

そうだとすると、カナダ少年赤十字の出版物や出品物を通して発信されたカナダとカナダ人のイメージは、国内外によって異なっていたことも推測できる。とりわけ、国内へは、イギリス以外の国からの移民と先住民族をイギリス系カナダ人と同化させ、イギリス人の価値観を共有させ、英語を共通語とすることが望ましかったが、国外に対してはカナダの豊かな自然、産業の発展、カナダの歴史においてヨーロッパ人が果たした役割とともに、先住民族の文化と歴史も発信されたことが推測できる。

現時点では、カナダからの通信物についての具体的なデータが未確認であるため、上記の仮説の検証を今後の課題にするしかないが、このような違いが見られることは非常に興味深い。

## 3. 国際通信交換の意義と評価

1934 年に国際通信交換の意義と期待できる効果について、オンタリオ州にあるクイーンズ大学の校長であった W.H. ファイスは、カナダ少年赤十字団員へのメッセージの中で次のように語った。

> 皆さんの将来の幸福と繁栄は、次の半世紀に戦争を回避できるか否かに大きく左右されます。そして、戦争を回避できるかどうかは、赤十字連盟が目的に掲げる国際的友情が、どれほど広く育まれていくかに大きく依存するので

す。

皆さんは、嫌いな人なら絶対に許せないことでも、友達なら大目に見てあげられるということがあるでしょう。友達になる方法は、お互いをよりよく理解することです。外国の少年少女たちへの理解が深ければ深いほど、将来の平和と安全への希望は明るく輝くのです[49]。[50]

ファイスは、少年赤十字の国際通信交換が戦争を回避する手段であると強く期待していた。カナダ少年赤十字の機関誌にも、このような期待を読み取れる記述が散見されている。

1930年代前半は、世界各国において政治的な緊張が高まっていく時期であり、満州事変(1931年)、ナチスの台頭(1933年)など政治的な摩擦を引き起こすような事件が相次いでいた。こうした状況の中で、カナダ少年赤十字の指導者と関係者は警鐘を鳴らし、少年赤十字の国際通信交換の拡大、それを通して各国の子どもたちの友情関係の深化の必要性を主張していた。

前述のように、カナダ少年赤十字の機関誌の編集者であったジェーン・ブラウンは、1930年代後半に、機関誌の記述を通して、人道精神と国際親善をより強く主張し始め、団員たちの国際親善の活動を奨励していた。

この時期に、カナダ少年赤十字の国際通信交換の回数が大きな増加したのは、カナダの団員たちが、ジェーン・ブラウンの呼びかけに応えるよう、国際通信交換を以前にも増して積極的に行なっていたからであろう。

さらに、少年赤十字の指導者は、各国の子どもたちが国際通信交換を通して友達になることを強く望んでいたようだ。各国の子どもたちは、友達になると、お互いの国の歴史と文化に興味を持ち始め、お互いの理解をさらに深めるという効果が期待されたようだ。例えば、以下の引用は、この期待を次のように紹介している。

毎日のように赤十字本部の事務所を介して運ばれる通信物を見れば、誰も〔国際通信交換の〕価値を疑うことはできないだろう。国際通信交換の動機となっているのは、通信物にしばしば見られる次の言葉によく表現されてい

る。「皆さんの交換アルバムを受け取ってから、私たちは皆さんの国についてもっと知りたいと思って、手に入りそうな本を全て読んでしまいました。」そして「私たちはこんなに遠く離れているのに、少年赤十字の活動を通じて友達になれるのは、不思議なことではないでしょうか。」赤十字の活動の教育的な副産物は、非常に価値のあるものである[51]。[52]

少年赤十字の国際通信交換のおかげで、各国の子どもたちがお互いの国に興味を持ち始め、お互い友達になるという効果が期待されていた。このような少年赤十字の活動の副産物は、大きな価値があるという。こうした効果を少年赤十字の指導者だけではなく、赤十字の運動に参加していない教育者も評価し、国際通信交換は、世界平和と国際親善に多大な貢献をしていると主張していた[53]。

このような評価は、カナダの資料だけではなく、アメリカや日本の資料にも散見される。例えば、日本少年赤十字の機関誌には、アメリカの子どもたちが、日本の子どもたちとの国際通信交換を行なうことによって、お互いを「丁度お隣りにお住みのやうな気」にし、「いつまでも仲よしのお友達で」、「お互ひに少年赤十字団員として活動し、海を隔てて友情の花を咲か」せる感情にしたという記述が載せられている。

以上のように、カナダ少年赤十字の国際通信交換は、各国の子どもたちの友達関係を促進させることで、戦争を回避できることが期待されていた。そのため、通信物の内容は、外国の子どもたちの関心をそそるような特有のものと、各国の子どもたちが共通するもの（人形、玩具、少年赤十字の活動）、両方とも含んでいたと思われる。

さらに、前出のファイス校長が説いたように、各国の子どもたちが友達になったら、お互いのことを許し合い、戦争をしなくなるだろうという、友情への大きな期待が寄せられていたのがわかる。各国において行われた少年赤十字の国際通信交換は、「友情」や「友達」という概念に何らかの影響を与えたのかどうかは、非常に興味深い疑問である。これについての検討も今後の課題にしたい。

## おわりに

本稿では、1920～30年代におけるカナダ少年赤十字に注目し、団員数の変遷、交流相手国、通信物の数と特徴、国際通信交換の意義と評価を具体的なデータと例を示しながら明らかにした。カナダ少年赤十字は、1915年に初めて結成されたが、1922年に正式に創立されて以降、着実に規模を拡大していった。団員数の変遷を見ると、その数は毎年のように増加していたが、アメリカと日本と比べて遥かに少なかったのも事実である。

さらに、カナダ少年赤十字から送られた通信物の数は、毎年のように増加していた。カナダは、1935年にアメリカ、日本、ポーランドに次いで世界第4位、1937年にアメリカと日本に次いで世界第3位、1938年と1939年にアメリカに次いで世界第2位であった。そして、交流の範囲も非常に広かった。そのため、カナダ少年赤十字は、世界各国の少年赤十字運動において重要な位置を占め、大きな成果を上げた国であったし、日本の国際通信交換においても重要な位置を占めた国であったと言える。

そして、本稿において、カナダの各州の団員数、通信物の発信数の変遷を具体的なデータに基づいて示すことができた。だが、各州における国際通信交換の実態に関して不明瞭な点がまだ残っているため、さらなる精査が必要である。

カナダ少年赤十字の指導者は、子どもたちの国際通信交換に大きな期待を寄せ、各国の子どもたちの間の絆が深まると、戦争が回避できると信じていた。特に1930年代には、カナダ少年赤十字団員の国際交流が奨励された。その影響もあり、1930年代後半にはカナダから送られた通信物の数が大きく増加した。

本稿において、少年赤十字の活動に先住民族の子どもたちがどのように関わったのかという興味深い課題を初めて取り上げた。カナダ少年赤十字の活動を通して、先住民族の子どもたちが「カナダ化」された一方で、国際通信交換に参加し、1934年に東京で行われた少年赤十字展覧会に多くの出品物を送ったことを通して、世界各国の団員たちに自分の民族の文化を紹介することもできた。当時は、先住民族を象徴する出品物は、カナダらしさを表すものとして、日本へ発送されたと推測できる。カナダ以外の国において、先住民族の子どもたちがどのように少年赤十字の活動に関わったのか関心をそそられる課題である。

さらに、本稿において、カナダ少年赤十字の国際人形交流について言及することができなかったが、このような交流が実際に行われたことは、容易に推測できる。そのため、カナダ少年赤十字の国際通信交換において人形がどのような位置を占めたのか、どの国と交換されたのか、今後の検討課題にしたい。

最後に、各国の少年赤十字団員の国際交流の際に、各国の子どもたちの友情の絆に大きな期待が寄せられていたことが、「友情」や「友達」という概念の意味に何かの影響を与えたのかどうかも非常に興味深い。これについても今後検討したい。

## 註

1 The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, Toronto: The Canadian Red Cross Society, 1927, p.14.

2 Ibid., p. 14.

3 日本少年赤十字の国際人形交流については、拙稿「日本少年赤十字の国際人形交流」(一)、(二)『人形玩具研究 : かたち・あそび : 日本人形玩具学会会誌』第 28 号、日本人形玩具学会、2018 年、pp. 161-171, pp. 172-182 ; 日本少年赤十字の国際通信交換については、拙稿「1920 ～ 30 年代における日本少年赤十字の“国際通信交換”」『間谷論集』第 14 号、日本語日本文化教育研究会、2020 年、pp. 1-25 ; アメリカ少年赤十字の交際通信交換については、拙稿「1920 ～ 30 年代におけるアメリカ少年赤十字の国際通信交換（一）―団員数の変化と各国との関係―」『第 8 回日本語・日本文化国際フォーラム 論文集』大阪大学日本語日本文化教育センター、2020 年、pp. 178-187 を参照いただきたい。

4 Sheehan, Nancy M. “Junior Red Cross in the Schools: An International Movement, a Voluntary Agency, and Curriculum Change,” *Curriculum Inquiry*, Vol. 17, No. 3, London: Taylor & Francis, 1987, pp. 247-266.

5 太平洋に面したカナダ最西部にある州。

6 Walsh, Andrea. “Healthy bodies, strong citizens: Okanagan Children’ Drawing and the Canadian Junior Red Cross,” *Depicting Canada’s Children*, Waterloo: Wilfrid Laurier University Press, 2009, pp. 279-303.

7 Valdes, Annmarie. “‘I, being a member of the Junior Red Cross, gladly offered my services’: Transnational practices of citizenship by the international Junior Red Cross youth,” *Transnational Social Review: A Social Work Journal*, Vol. 5, No. 2, London: Taylor & Francis, 2015, pp. 161-175.

8 同様な指摘は、以下の研究にも見られる。Gibbons, Karrie Lorena. "*Even the Youngest Can Help" The First World War, Girls and The Junior Red Cross in Western Canada* (Master's Degree Thesis), Saskatoon: Department of History University of Saskatchewan, 2020, pp. 67-87. URL: https://harvest.usask.ca/bitstream/handle/10388/12800/GIBBONS-THESIS-2020.pdf?sequence=1&isAllowed=y (Retrieved: 2020/12/13); Walsh., op.cit., pp. 279-303.

9 カナダ東部にある州。

10 Glassford, Sarah. "'International Friendliness' and Canadian Identities: Transnational Tensions in Canadian Junior Red Cross Texts, 1919-1939," *Jeunesse: Young People, Texts, Cultures*, Vol. 10, No. 2, Winnipeg: The Center for Research on Young People's Texts and Cultures, University of Winnipeg, 2018, pp. 52-72.

11 ニューファンドランドは、イギリスとカナダから自治を求め、1854 年に自治政府を樹立し、1907 年には事実上の独立国となったが、第一次世界大戦後の経済不況により、1934 年に自治権を返上し、イギリスの直轄植民地に戻った。ニューファンドランドは、ニューファンドランド州としてカナダに加盟したのは、1949 年のことであるが、1937 年以降、カナダ少年赤十字の統計データでも計算されるようになった。そのため、本稿においては、1937 年以降のカナダ少年赤十字の団員数、通信交換回数は、ニューファンドランドのデータも計算されている。ニューファンドランドに属したラボドル州のデータもその中に含まれている。

12 この図は、筆者が作成したものである。

13 この図は、以下の資料に基づいて、筆者が作成したものである。The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, Toronto: The Canadian Red Cross Society, 1922-1941.

14 この図は、以下の資料に基づいて、筆者が作成したものである。Statistics Canada, Section W: Education. *Total enrolment in elementary and secondary schools, by control,1 Canada and by province, selected years, 1920 to 1975*. URL: https://www150.statcan.gc.ca/n1/pub/11-516-x/sectionw/4147445-eng.htm#2 (Retrieved: 2020/12/13); The Canadian Red Cross Society. Annual Report, 1922-1941, op.cit.

15 American National Red Cross. *Annual Report*, Washington D.C.: American National Red Cross, 1925, 1930, 1935, 1940.

16 この図は、以下の資料に基づいて、筆者が作成したものである。American National Red Cross. *Annual Report*, Washington D.C.: American National Red Cross, 1922-1941; 日本赤十字社編『日本赤十字社史続稿』下巻、日本赤十字社、1929 年、pp. 1003-1004; 日本赤十字社編『日本赤十 字社史続稿』第 4 巻、日本赤十字社、1957 年、pp. 5-15; 日本赤十字社編『日本赤十字社社史稿』第 5 巻、日本赤十字社、1969 年、p. 270; The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1922-1941, op.cit.

17 "The Junior Red Cross." *The Canadian Red Cross*, Vol.2, No. 1, Toronto: The Canadian Red Cross Society, Jan. 1923, p. 5.

18 The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1927, op.cit., p. 17.

19 この図は、以下の資料に基づいて、筆者が作成したものである。The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1922-1941, op.cit.

20 ジェーン・ブラウンは、少年赤十字の活動に関わる前に、教育者と看護師として活躍していた。そして、1911 年にはサスカチュワン州レジャイナ市の学校において健康の保持と促進の活動に関わり、1917 年にはサスカチュワン州教育省学校衛生部長になった。それ以降、初代のカナダ少年赤十字部長になり、カナダ少年赤十字の機関誌の編集者になった。

21 井上圓治「昭和九年を回顧して少年赤十字団員に檄す」『博愛』第 572 号、日本赤十字社、1935 年、pp. 34-35。

22 “The Canadian Exhibit for the XVth International Red Cross Conference in Tokyo, Japan, October, 1934.” *The Canadian Red Cross Junior*, Vol.12, No. 7, Toronto: The Canadian Red Cross Society, Sep. 1934, pp. 7-8.

23 「フランス少年赤十字主催の人形展覧会」『少年赤十字 = The Japan Junior Red Cross』第 10 巻第 3 号、日本赤十字社、1935 年、pp. 15-16。

24 「ハンガリー展覧会へ出品」『少年赤十字 = The Japan Junior Red Cross』第 11 巻第 1 号、日本赤十字社、1936 年、pp. 16-17。

25 この図は、以下の資料に基づいて、筆者が作成したものである。The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1929-1939, *op.cit*. ; 赤十字社編『事業年報』日本赤十字社、1927 ～ 39 年 ; 前掲の桝居孝「大正期・昭和初期の国際理解教育－ 1920 年代～ 30 年代の「少年赤十字」の国際交流活動－」、p. 81 ; File: Dr #49(5b) Records – ANRC – Junior Red Cross, International School Correspondence, 1919-44; Monographs; 1946-1986 (Entry # P83, Box # 146); American Red Cross/Historical Division; RG Records of the American National Red Cross; National Archives at College Park, College Park, MD. なお、アメリカ少年赤十字の国際通信交換に関する統計データは、7 月から翌年の 6 月までの期間をもとにして計算されているため、本来ては、各データに相当する期間 ( 例えば、1923 ～ 24 年 ) を示すべきであるが、今回は、カナダと日本のデータのが計算された期間に合わせるために、表記を改めたことを断っておきたい（例えば、1923 ～ 24 を、1923 年にした）。その理由で、アメリカのデータは、あくまで目安であり、正確ではないという可能性があることを了承いただきたい。

26 The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1935, *op.cit*., p. 26.

27 The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1937, *op.cit*., p. 22.

28 The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1938, *op.cit*., p. 20.

29 The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1939, *op.cit*., p. 23.

30 赤十字社編『事業年報』日本赤十字社、1938 ～ 39 年 ; 桝居孝「大正期・昭和初期の国際理解教育－ 1920 年代～ 30 年代の「少年赤十字」の国際交流活動－」『戦争と平和 :

大阪国際平和研究所紀要』第 12 号、大阪国際平和センター、2003 年、p. 81。

31 前掲、拙稿「1920 ～ 30 年代における日本少年赤十字の“国際通信交換”」、pp. 1-25。

32 この図は、以下の資料に基づいて、筆者が作成したものである。前掲、赤十字社編『事業年報』(1924 ～ 42 年 )。

33 File: Dr #49(5b) Records – ANRC – Junior Red Cross, International School Correspondence, 1919-44, *op.cit*.

34 この図は、以下の資料に基づいて、筆者が作成したものである。The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1931-39, *op.cit*.

35 現時点では、1930 ～ 35 年の間のデータは、断片的であり、全ての州に関する団員数が確認できないため、今回はこの期間を分析対象にしないことにした。

36 表 1－1 と 1－2 は、以下の資料に基づいて、筆者が作成したものである。The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1926-29, 1936-41, *op.cit*.

37 Sheehan, op.cit., p. 254.

38 この図は、以下の資料に基づいて、筆者が作成したものである。The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1940, *op.cit*., p. 17.

39 カナダのパルプ製造と製紙業は、1800 年代以降急速に発展し、長い間、カナダの経済において中心的な位置を占めていた。

40 毛皮を取るための動物を捕獲し、毛皮貿易を行うことは、ヨーロッパ人とカナダの先住民族との間の接触の初期歴史において中心部分を占めていた。その際、ビーバーの生皮は、主要な貿易品であったため、現在でもビーバーがカナダの象徴の一つである。

41 1670 年に設立されたビーバーなどの毛皮貿易会社。カナダの歴史において極めて重要な役割を果たした。

42 エドワード 8 世（在位、1936 年）が有していた牧場。現在、カナダの文化的景観の一つ。

43 太平洋に面したカナダ西部のインディアンの伝説に登場する神鳥。

44 カナダ国旗にも描かれているカナダの象徴。

45 “The Canadian Exhibit for the XVth International Red Cross Conference in Tokyo, Japan, October, 1934,” op.cit., pp. 7-8.

46 原文は、以下の通りである。The exhibit contains a wide range of material. Illustrated portfolios, in neat hand-script, give highlight of Canadian history and specimens of Canadian products, including timbers and mineral ores; illustrations and descriptions of various Canadian industries, especially pulp-making, and fur trapping; dolls showing the dress of Canadian people and illustrations of home furnishings and Canadian sports equipment.

From the “Willing Workers” of the intermediate school at Gaspé there will go to Japan a beautiful portfolio telling a graphic story of the celebration taking place at Gaspé this summer commemorating the landing of Jacques Cartier in 1534 ,together with an illustrated description

of Canadian winter sports. Attached to the portfolio are miniatures of toboggan, a sleigh, a pair of snowshoes, skis and skates. From the Juniors of the Normal School, Calgary, comes another historic sketch, commencing with the coming of the first white man, Cabot, to the shores of North America in 1497. It has illustrated description of the development of the principal cities of Canada, the story of the Hudson's Bay Company, pictures of the E.P. Ranch, near Calgary, drawing of the birds, flowers and animals of Western Canada. "Uncle Jack's Juniors," from Temiskaming [sic!], Ontario, are sending a typically Northern Ontario exhibit – twigs taken from twenty different Canadian trees and six samples of mineral ores. Indian children from Union Jack branch, Berens River, Manitoba, are sending a unique display of intricately made moccasins, bead necklaces and ornaments, while another class of Indian children from Hazelton, B.C., are contributing a hooked rag, delicately coloured [sic!], into which they have woven the design of the "thunderbird" combined with the Maple Leaf, bearing in its center the Red Cross emblem. The typical Canadian schoolgirl is exemplified by a doll, dressed by the George Street School, Belleville, in a blue-pleated skirt, white, blue-trimmed middy and tie, while a baby doll and its cradle – the baby exquisitely outfitted by the domestic science pupils of Lampson Street School, Esquimalt, B.C., and its cradle made by the boys in the manual training classes – typify 'home industries'.

47 "The Canadian Exhibit for the XVth International Red Cross Conference in Tokyo, Japan, October, 1934," op.cit., pp. 7-8.

48 前掲、拙稿「日本少年赤十字の国際人形交流」（一）、（二）、pp. 161-171、pp. 172-182。

49 The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1934, *op.cit*., p. 19.

50 原文は、以下の通りである。Your future happiness and prosperity must largely depend on the avoidance of war during the next half century, and the hope of avoiding war depends on the growth of that international friendliness which it is the object of the Red Cross Society to promote.

You can easily tolerate in a friend what seems to you intolerable in a person you dislike. And the way to make friends is to know them better. The more the Juniors learn to understand and appreciate the boys and girls of other countries, the brighter will be hope of security and peace.

51 The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1931, *op.cit*., pp. 27-28.

52 原文は、以下の通りである。No one could doubt its value if he saw the day by day exchanges that pass through National Office. A motif that runs through it all might be described in the words which one so often finds,- "Since getting your portfolio, we have become so interested in your country that we have read all the books we could get on it." And,- "Isn't it strange that, though you are so far away, we can be friends through the Junior Red Cross?" The educational by-products of this Red Cross activity are extremely valuable.

53 The Canadian Red Cross Society. *Annual Report*, 1937, *op.cit*., p. 22.

54「アメリカから」『少年赤十字＝ The Japan Junior Red Cross』第 12 巻第 1 号、日本赤十字社、1937 年 1 月、pp. 19-20。

## 付記

本研究は科学研究費助成事業 ( 若手研究 ) 課題番号 :19K13318 の助成を受けたものである。

# International School Correspondence of the Canadian Junior Red Cross in the 1920s and the 1930s.

BEREZIKOVA Tatiana

In Canada the Junior Red Cross movement started in 1915 during the First World War, and was established officially in 1922. It very soon became one of the most recognizable organizations for the Canadian children. Its main goals – promotion of health, work for community and international friendliness – were shared by many children and adults. The third goal – international friendliness – was conducted through exchanges of international correspondence (albums, letters, toys, dolls etc., which represented history and culture of Canada along with activities of children as members of Junior Red Cross) between the Canadian children and children from other countries. These exchanges were considered as an important way to create a world peace and international understanding.

In the 1930s the Canadian Junior Red Cross took a very active part in international cultural exchanges of correspondence and in the late 1930s became the third (after the US and Japan), and then the second (after the US) largest sender of international correspondence in the world.

This paper explores the development of the Canadian Junior Red Cross and its international activities, namely international correspondence. It focuses on membership, range of international exchanges, the countries that became important exchange partners for Canadian juniors, the amount of exchanges, and its content and significance.